



野の花を活けたい、という初心に帰って。

火の国阿蘇の
恵みのブランド

然
zen
A s o C i t y

二月生まれだから、如月(きさらぎ)窯と名づけた。
きさらぎの語源は、寒さで着物を更に重ねて着る「着更着」説や、
草木が生えはじめる月「生更木」説があるといわれています。

富田英子さんの窯は後者が似合う。

大学で社会福祉を専攻し、卒業後ケースワーカーに携わっていた。
そのうち、モノづくりへのころざしが強く、

陶芸の道に飛びこみました。

ケースワーカー時代の人生経験は、いま得がたい財産となっている。
土として、阿蘇カルデラ内に堆積した

阿蘇黄土(リモナイト)も採用。

邪馬台国の時代から使われていたというこの土は、
鉄分を多く含み、独特の風合いを生みます。

「野の花を活けたい、そういう陶器を」

ベテランとなつたいまも、つねにその初心に帰ります。

阿蘇如月窯 富田英子

あるがまま、という貴さ。

人と自然が共作する阿蘇。